

夜間飛行

結城文

零時五分発成田行き

まどろむともなく目を閉じていたが

眠れぬままに機窓を覗く

稲妻のように赤い光が

一定の間隔をもつて

翼に閃く

地上で見るよりたくさんの大きな星が

みずみずしい光をもつてきらめく

地上のオレンジ色の灯

点々と小さな灯をともして

そこにかしこに人は暮らしているのか――

ともす灯のまばらなところをすぎて

都市の在り処をしめすか

豪華絢爛にちりばめたトパーズのビーズ

光のなにも見えない暗黒は海

機窓の右上上方 やや明るんだ空が見え

一筋さつと刷いた薄紅

東方からのわずかな光をうけ

彫刻家の奔放なオブジェのような

雲の林

東天の薄紅は赤みをまし

次第に空は白みはじめる

星はつねに同じ位置に輝いているのだが

見下ろす地上は暗黒になったり

トパーズの明かりになったり

つつましいひとつひとつの灯の点在になったり

天に流れているのは

あるかなきかの移ろいの時間

地に流れているのは

目まぐるしい移ろいの時間

狭い機窓のなか

錯綜し流れる

広大な空間と時間――

恍として

闇と光の饗宴のなかを漂う